

# 大学生の電子辞書使用ストラテジーの実態調査研究：高校時との比較を通して

佐藤 健\*1・松葉 哲史\*2

Email: [tsato@cc.tuat.ac.jp](mailto:tsato@cc.tuat.ac.jp)

\*1: 東京農工大学工学部

\*2: 法政大学生生活協同組合

◎Key Words 電子辞書, 学習ツール, 利用ストラテジー

## 1. はじめに

電子辞書は近年大きな進歩を遂げている。インストールされているコンテンツは英和・和英といった「辞書」に限定されず、百科事典、単語集、文法書、問題集など多岐にわたるようになってきている。加えて複数のコンテンツを同時に利用できるため、電子辞書特有の検索方法、すなわち一括検索、ジャンプ機能、手書き機能や単語帳機能といった方法も充実し、表示画面も白黒からカラーに移行し、図や音声提示も言語情報と同時に表示可能なマルチモーダル化したデバイスへ発展を遂げている。

そもそも電子辞書は、調べたい単語や表現の意味の検索を特定の場所に限定されることなく行うことを主目的とした、検索用デバイスであったと言える。確かにコンピュータ利用による外国語教育研究においては、例えば語彙のような学習項目は、リーディングやリスニングといった言語活動を通して付随的に学習されるという主張が大勢を占めており(Chun & Plass 1996<sup>(1)</sup>, Lomicka 1998<sup>(2)</sup>, Laufer & Hill, 2000<sup>(3)</sup>, Yoshii & Flaiz, 2002<sup>(4)</sup>)、辞書に掲載されている情報はあくまで言語活動を促進するために意味を素早く参照するためだけのものと考えられてきたように思われる。

しかし上述のような多様なコンテンツの搭載、複数の辞書を同時利用できるメリットを生かした高度な検索機能、そして図や音声などの同時提示を可能にした、すなわちマルチモーダル化した現在の電子辞書は、もはや単なる「参照ツール」としての役割を果たすだけでは十分ではなく、学習項目が持つ特徴を際立たせることによる学習者の気づきを促進し、それらを明示的かつ自律的に獲得するための「学習ツール」としての役割を果たすようになってきている(Pachler 2001<sup>(5)</sup>, Sato & Suzuki 2012<sup>(6)</sup>)。例えば Ellis (1995)<sup>(7)</sup>は、言語の習得にはある学習項目についての意味の詳説(semantic elaboration)やイメージによる仲介(imagery mediation)のような明示的学習ストラテジーを必要とするとしている、としている。これらは全て、現在の電子辞書が有する機能であるということが出来る。

コンテンツ、検索機能、マルチモーダル機能が充実することで、検索としての役割のみならず、明示的にある項目を書くとする学習ツールとしての役割を果たせるようになってい一方、利用者がその役割を果たす上での機能を使いこなせているのか、すなわち彼らの「電子辞書利用ストラテジー」がそれらの機能を

自身の学習環境に最適化できるまでに向上できている否か、言い換えるならば、「学習ツール」としての電子辞書の利用を学習者が実践しているか否かについての調査は殆ど行われてこなかったと言える。

## 2. 実態調査について

### 2.1 調査の目的

そこで本研究は、電子辞書の主たる使用者である大学生に対し、その使用実態を明らかにすることを目的としてアンケート調査を行うことにした。アンケートは大きく2つの種類に分類することが出来る。

### 2.2 アンケート調査

第1の調査は、電子辞書の主たる利用者である大学生の現在の電子辞書利用の実態を明らかにすることを目的とした。具体的には、電子辞書の利用開始時期、利用開始の動機、現在利用しているコンテンツ、それを用いて学習する教科、利用のタイミング(授業時、予習時、復習時、自学習時)、利用目的、利用する場所、利用している検索機能について、様々な大学、学部にも所属する学部、大学院生に対してインターネット上に作成した以上のアンケートに回答して貰う形で調査を行った。

もう1つの調査は、電子辞書利用ストラテジーの高校時と大学時の違いを明らかにすることを目的とした。上のアンケート結果によれば、大半の大学生は高校1年次に初めて電子辞書を使用したという結果が出ているが、高校までの学習と大学からの学習は、その教科、内容、目的、学習形態全てにおいて多様化かつ高度化すると考えるのであれば、それらに応じて電子辞書利用ストラテジーも変化するという想定に基づき、上述した第1のアンケートと同じ項目の質問を、高校時代での使用に遡って回答してもらった。高校時と現在の利用形態を項目ごとに比較することによって、高校時代と現在の大学時代での電子辞書利用ストラテジーの変化を観察・分析した。

### 2.3 アンケート結果の概要

アンケート項目ごとの具体的な数字、及び項目ごとの現在と高校時の対比の結果については、当日の発表時に行うこととするが、ここではその概要について述べるに留めておく。まずアンケート回答者が初めて電子辞書を利用したのは高校1年、すなわち高校入学時

であり、利用を始めた一番の動機は、学校や教師に勧められたというものであった。

現在と高校時の電子辞書の利用実態を項目ごとに見ていくことにより、大きく以下のような傾向を見ることが出来た。1) 高校時も現在も「検索」を主とした利用を行なっている、2) 自立学習のための利用頻度の大学時の減少、3) 検索ストラテジーの固定化、4) 限られたコンテンツのみの利用、というものである。

これらの結果は、高校次に獲得、利用したコンテンツ及びストラテジーをそのまま大学での内容も形態も異なる学習にそのまま移行させて利用していることを示唆している。更に電子辞書が持つ高度な機能も基本的には「意味の検索」に対してのみ利用している傾向があると言うことができそうである。

これらの結果は、大学における辞書利用に対する教育機会の必要性と、その機会不足という課題を露呈させている。

### 3. おわりに

本研究は、その豊富なコンテンツとマルチモーダル化により、電子辞書が「自律的学習ツール」としての大きな可能性を持つという前提のもと、今まであまり明らかにされてこなかった現在の大学生・大学院生の電子辞書利用実態を知るべく、大きく2つの種類のアンケート調査を行った。1つは大学生としての現在の電子辞書利用実態と、もう1つは高校時の電子辞書利用実態についてであった。この調査結果を元に、現在の利用実態のみならず、高校時での利用実態との比較を試みた。

上の2つのアンケートの集計結果によると、電子辞書独自の検索方法については高校時から一定のリテラシーを持ち、自身の学習項目・環境に合わせた形で利用できているように思える一方、高校から大学に移って、学習対象、内容そして形態(テストからレポート、論文、プレゼンテーションに)に大きな変化が生じているはずにもかかわらず、利用開始時、すなわち高校次に得た利用ストラテジーをほぼそのまま用いて、当時と全く異なる大学での学びを行なっている実態が明らかになった。

この結果は、利用者が、大学での学びに適応した辞書利用ストラテジーを習得する機会を、大学入学以降多く、あるいは全く持ってこなかったことが一因であると想定できる。学習者が例えば大学入学時に、大学での学習時にどのようなコンテンツを、どのように利用すべきかについての何らかの指示が与えられていればこのような結果にならなかったものと予想できる。これは大学での学びに対応する辞書利用ストラテジーを教育する必要性を強く示唆していると言える。

電子辞書を用いた学習は、利用する場所を問わず、都合に合わせた学習を可能にするという意味において、現在最も注目すべき学習形態である「モバイル・ラーニング」の一種とみなすことが可能であると考えられる。現時点では電子辞書は主に日本において大きなシェアを占めている一方で、他国は日本ほど普及しているとは言いがたい。しかし徐々に徐々に普及が進み、電子辞書利用研究は、理論的にも実践的にも今後のコンピ

ュータ利用外国語学習における最も重要な研究分野の1つになる可能性を孕んでいる。

本研究は、今まで検索ツールとして主に利用されてきた電子辞書を、その機能の向上に合わせて自律的モバイル・ラーニングのためのツールとして利用できるようにするために、現状の利用形態を明らかにした上で、電子辞書が持つコンテンツや機能を最大化する方策を考えるためのきっかけとしての役割を果たすことが出来ると考えている。

### 参考文献

- (1) Chun, D.L., & Plass, J.L.: Effects of multimedia annotations on vocabulary acquisition. *Modern Language Journal*, 80(2), pp.183-198 (1996).
- (2) Laufer, B., & Hill, M.: What lexical information do L2 learners select in a CALL dictionary and how does it affect word retention? *Language Learning and Technology*, 3(2), pp.58-76 (2000).
- (3) Lomicka, L. L.: "To Gloss or Not To Gloss": An Investigation of Reading Comprehension Online. *Language Learning & Technology*, 1, 41-50 (1998).
- (4) Yoshii, M., & Fraitz, J.(2002). Second Language Incidental Vocabulary Retention: The Effect of Text and Picture Annotation Types. *CALICO Journal*, 20(1), 33-58.
- (5) Pachler, N.: Electronic reference tools for foreign language learners, Teachers and users: Offline vocabulary look-up programs. *Language Learning Journal*, 24, pp.24-29 (2001).
- (6) Sato, T & Suzuki, A: From a Gloss to a Learning Tool: Does Visual Aids Enhance Better Sentence Comprehension? *EuroCALL 2012 Proceedings*, pp.264-268 (2012).
- (7) Ellis, N.C: The Psychology of foreign language vocabulary acquisition: Implication for CALL. *Computer Assisted Language Learning*, 8(2-3), pp.103-128 (1995).